

詩としての哲学 [要旨]

富田恭彦

リチャード・ローティが「詩としての哲学」という哲学のあり方を称揚するとき、彼が念頭に置いているのは、「真なる信念は実在の正確な表象であるという考えを受け入れるのを拒否する」というプラグマティズムの核心と、「想像力は理性よりも優位に立つ——理性にできるのは想像力が切り開いた道をたどることだけである」とするロマン主義の核心である。このような「詩としての哲学」の動向に対して、例えば『純粹理性批判』のカントの「超越論的原理論」の主張は、明確に対立するように見える。しかし、カントの議論を、彼が伝統として意識していた西洋古代からの思想の流れの中で見ると、私たちはカント自身が、自らがよしとした自然科学の基本原則を、独自の仕方で絶対化・超歴史化しようと試みたにすぎないことを、認めざるをえない。すなわち、カントの議論の根底には、彼が若い頃から受け入れてきた自然科学の基礎的な見解があり、純粹知性概念（カテゴリー）の選択にせよ、それを導く基盤であるかのように彼が提示した伝統的論理学の判断区分にせよ、それらが、そうした自然科学の基礎的な見解に合うように恣意的に選ばれたものであることは、明らかである。

まずは、カントが挙げたカテゴリーの半分を占める、「量のカテゴリー」と「質のカテゴリー」であるが、それらは、それらの使用規則である「直観の公理」および「知覚

の予想」という原則に明らかなように、(しばしば行われる訳に従えば)「外延量」と「内包量」に関わる。この二つの量(ないし大きさ)の区別は、アリストテレスに由来し、のちには *quantitas extensiva* もしくは *magnitudo extensiva*、および *quantitas intensiva* もしくは *magnitudo intensiva* 等の区別として、アキナスやスコトゥスをはじめ、多くの知識人によって使用されてきた。この区別は、自然科学においても重視され、今日でも例えば *extensive property* (示量的特性) および *intensive property* (示強的特性) の区別として専門常識的に多用されている。当時、この区別は、概して、西洋古代に培われ西洋近代に復活した原子論(もしくは粒子仮説)の(ロック流に言えば)「一次性質」と「二次性質」の区別に対応し、またカント流に言えば「直観」と「感覚」の区別に対応するものであって、カントもまたこの区別を極めて重要な区別の一つとした。そして、これをカテゴリーの区別として捉え、私たちが生まれながらに持っている〈ものごとの捉え方〉として位置づけようとしたのである。

同様に、カントは、カテゴリーの三つ目のグループである「関係のカテゴリー」として、「内属性と自存性」、「原因性と依存性」、「相互性」を挙げ、それらが伝統的論理学の「定言判断」、「仮言判断」、「選言判断」を手掛かりに導き出されるとした。しかし、そうした判断形式からそれら三つの関係のカテゴリーを導き出すカントのやり方は、概して極めて強引なものであり、しかも、それら三つのカテゴリーに対応する原則は、カントが力学の三つの法則として重視していた「質量保存の法則」と「慣性の法則」

と「作用・反作用の法則」に対応するように作られていた。

判断形式からカテゴリーへ、そしてさらには原則へというカントの議論の具体的不備もさることながら、このように見直したとき、カントが上記のように、歴史的に生成してきた仮説的思考の創造的産物を強く確信し、その固定化・絶対化を強引に進めようとしたことは明らかである。つまり、カントですら、新たな考えを生み出すことによって進んできた自然科学の当時の成果を基盤として、それを固定化するという不当な試みをなそうとしていたのである。

このことは、私たちの意思とは関わりなく定まったものがあって、私たちはそれに従って生きるしかないとしたカントですら、結局のところ、自らが確信していた自然科学の基本的区別や諸原理に依拠するという仕方で、仮説的思考を担う〈軽やかな知性〉としての想像力に依拠していたことを示している。

ところで、ハイデガーは *Sein und Zeit* 以降、「詩作」と「思索」を重ね合わせる形で思索を続け、「詩作とは存在を言葉によって作り出すこと (Stiftung) であり、「存在を探究する者は、探究者としての力を最も特徴的な仕方で過剰に持っているという点において、存在を「作り出す」詩人である」としたが、彼のそういった考えは、ローティ流の「詩としての哲学」の思想に連なると考えられるかもしれない。しかし、ハイデガーには、思索する者に「合図」する「存在」が、厳然とあり続けていた。この意味において、私はハイデガーを「詩としての哲学」の担い手の一人とすることを躊躇する。